

日本ジオパークの再認定審査結果

2015年12月14日
日本ジオパーク委員会

● 以下の6地域が10月－11月の現地審査に基づき本日の日本ジオパーク委員会で再認定の可否につき審議され、以下の結果となった。

再認定：恐竜渓谷ふくい勝山、磐梯山、秩父、男鹿半島・大潟

条件付再認定：下仁田、茨城県北

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークは2013年に条件付き再認定となり2年目の今年、再認定審査の対象となった。

他5地域は2011年に日本ジオパークネットワークへ新規加盟し、今年4年目となり再認定審査の対象となった。

■ 再認定された地域の特徴 ■

1. 恐竜渓谷ふくい勝山

2013年の再審査において条件付き再認定となった後、県立恐竜博物館を主要ジオサイトとして位置づけるとともに、ジオパークを推進する組織（ジオパーク協議会事務局）の大幅な強化、エコミュージアムとジオパークの連携進展など課題とされた項目の多くについて改善が認められた。また、地域住民のジオパークへの参画が進んでいる。したがって日本ジオパークとして再認定する。

2. 磐梯山

4年間の実績が良く見えており、前回の指摘事項もおおむねすべてクリアしている。全体のストーリーの中心にあるのが磐梯山であり、それと動植物や人々の暮らしの関連性がうまく示されている。ガイドは各エリアにおり、それぞれ強みを持っている上レベルも高いように見受けられる。アクティビティなどの多様なプログラムが常に提供できる場所もある。保全に関しては、国立公園とうまく連携し、ガイドが積極的に参画する形で、保全計画を進めており大きく評価できる。住民向けには、ガイドの学習会や公民館のセミナー等により普及がある程度図られており、火山砂防フォーラムなども実施された。運営体制では、地域連携を含めて拡充が必要であるが、専門員を専属で配属し体制強化に努めている。以上により、日本ジオパークとして再認定する。

3. 下仁田ジオパーク

長年この地域で取り組まれてきた地質学研究の成果をもとに、一般への普及活動や地域の地学的資源を活かした学校教育が行われている。最近では地域住民によって自発的に日本ジオパーク下仁田応援団が組織されるなど、認定後の活動により当初よりジオパーク活動が広がってきている。しかしながら、ジオパークの中心となる運営体制が確立されていない。地域住民、地元業者、研究団体、市民ガイド団体、行政組織等様々な関係者間の情報共有と意思決定の場を形成する必要がある。ジオサイトの科学的な価値の再評価を行い、ジオパークとしての活動の質の向上を目指していただきたい。したがって条件付きで日本ジオパークとして再認定とする。

4. 茨城県北ジオパーク

広域にわたるエリアのなかでは、インタープリターと呼ばれるガイドが活発な活動を継続している。この活動と、茨城大学地質情報活用プロジェクトに所属する大学生・大学院生、自治体担当者、民間企業が連携しており、ジオパークを活用したボトムアップ型の地域振興の素地がある。しかしながら、エリア内の住民、市町村および茨城県のジオパーク活動に対する理解や認識は低く、持続可能な運営体制は構築されていない。また、全国規模で行われる日本ジオパークの会議や大会にほとんど参加しておらず、他のジオパークから学ぶ体制が不十分である。拠点施設づくりも遅れている。したがって、条件付きで日本ジオパークとして再認定とする。

5. 秩父ジオパーク

2011年の日本ジオパーク認定以降、保全、教育、観光等様々な分野へと、地域住民の自主的活動、様々な連携団体からの事業やサポートがおこり、ボトムアップ活動が着実に浸透し、ジオツーリズムの拠点となる施設や看板の整備が進みつつある。今後は、さらに質の高いジオパークを目指すために、事務局・運営体制を見直すとともに、国内初の複合指定天然記念物となる見込みの「古秩父湾堆積層及び海棲哺乳類化石群」などを取り込んで、秩父の多様性を包括できるテーマが構築されることが期待されている。以上のことから日本ジオパークとして再認定する。

6. 男鹿半島・大潟ジオパーク

大地と人々との関わりのジオストーリーが構築されている。新設された拠点施設を中心に充実した学校教育プログラムが展開され、ジオツーリズムにおいても自主的なガイド活動や食を絡めたツアー開発など新たな取組みが進められつつある。県内連携による研究助成事業など先駆的な取組みもある。今後、観光客の導線を意識した誘導情報の整備や、全体をより一体化させたジオストーリーの構築が望まれるが、これらを実現できる組織や運営体制がある。以上のことから日本ジオパークとして再認定する。